教員養成課程における「感覚をつなぐ表現活動」の試み
―本学児童学科の「保育内容演習（表現）」の授業内容から―

岡　林　典　子　　矢　野　　真
（児童学科教授）　　（児童学科教授）

本稿では，「感覚をつなぐ表現活動」として手触りや匂いを音・形・色で表現する授業内容について検討した。手触りの素材として①サンドペーパー，②綿，③ビーズ，匂いの素材として①ヒノキ，②ケヤキ，③オレンジ，④緑茶とほうじ茶を準備した。オノマトペを介して色・形・音での表現がなされた。この表現活動から，学生は表現の多様性への気づきや，保育につながる学びを得ることができていた。

キーワード：教員養成課程，保育内容，表現，感覚，オノマトペ

１．研究の背景と目的

本研究の目的は，筆者らが担当する教員養成課程（本学児童学科）における「保育内容演習（表現）」の授業で試みた「感覚をつなぐ表現活動」の内容について検討することである。

2016年（平成28年）12月の中教審教育課程部会答申を受けて，2017年（平成29年）３月に新しい学習指導要領等が告示され，幼児教育は学校教育の始まりとして明確に位置づけられた[1)]。こうした流れにおいて教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則の改定がなされ，2019年（平成31年）４月より新教職課程がスタートした。本学では2018年（平成30年）に再課程認定を受け，2019年４月より新たな教育体制での教職課程が始まった。このような背景のもと，「保育内容演習（表現）」は2020年度の２回生（2019年４月入学）から，岡林と矢野が共同して担当することとなった。

それまでの旧カリキュラムにおいて，「保育内容演習」は「保育内容演習（音楽表現）」（３セメスター・２年次前期に岡林が担当）と「保育内容演習（造形表現）」（４セメスター・２年次後期に矢野が担当）として別々に配置されていたため，音楽・造形・身体・言葉などを統合した表現活動を同一授業内で行うことができず，それらを統合して捉えることは学生自身に委ねられていた。また，音楽表現での「音を描く」課題では，混色やぼかしなどの造形の基礎技能について適切な助言を与えることができず，音楽と造形の教員間での連携が課題であった[2)3)]。

新カリキュラムではこうした連携が可能となり，これまでの反省を踏まえて授業内容を話し合い，五感を通して感覚をつなぎ，音・形・色・動きを関連づけたプログラムを試みることにした。本稿では15回の授業内容から，手触りや匂いを音・形・色で表現することを試みた表現活動について考察する。音・形・色を関連づける表現活動の研究はいくつかなされているが[4)]，手触りや匂いと音・形・色を関連づける表現活動はあまり試みられていない。

２．本学児童学科における「保育内容演習（表現）」の位置づけと授業概要

２．１「保育内容演習（表現）」の位置づけ

本学児童学科における表現関係の科目（音楽や造形に関するもの）は，大学の４年間で学生が乳幼児の表現についての理解を深め，子どもたちの感性や表現を豊かに育むための実践力や指導力を身に着けることを目指して配置されている。表１に児童学科の表現関係の科目を挙げた。先ずは，「児童表現学」（必修・１セメスター）に始まり，「幼児と表現（必修・２セメスター）」，「児童音楽Ⅰ」「児童図工Ⅰ」（各必修・３セメスター）などと，セメスターが進むにつれ，順を追って学びが深められていく。「保育内容演習（表現）」（表１の◆印）は，必修科目として２年次の４セメスターに位置づけられている。

２．２「保育内容演習（表現）」の授業概要

この授業では，１年次に配当されている「児童表現学」や「幼児と表現」の講義からの学びを踏まえ，演習形式による表現活動（造形・音楽・身体）の体験や，情報機器の活用を含む教材研究を進めている。また，学生が幼児の表現の特性を理解して，保育者

表１　本学児童学科の表現関係科目の一覧

セメスター	授業科目
1	「児童表現学」（必修）
2	「幼児と表現」（必修）
3	「児童音楽Ⅰ」（必修） 「児童図工Ⅰ」（必修）
4	**◆「保育内容演習（表現）」（必修）**
5	「児童図工Ⅱ」（選択） 「音楽あそび」（選択）
6	「児童音楽Ⅱ」（選択）
7	「音楽応用演習Ⅰ」（選択） 「おもちゃ研究」（選択）
8	「音楽応用演習Ⅱ」（選択）

として造形的・音楽的・身体的表現を総合的に捉え，表現活動を適切に支援したり，指導したりするための知識や技能・判断力を身に付けることを目指している。

2021年度の授業は，特に五感を通して感覚をつなぐ表現活動を工夫し，授業計画を立てた。表２に15回の授業内容を示す。授業は４クラスを矢野と岡林が共に担当しているため，第２回と３回，第４回と５回，第６回と７回，第８回と９回，第10回と11回は，同じ内容で４つのクラスを隔週交代にして進めた。第11回の授業については岡林が担当したが，内容・方法については矢野と十分に話し合った。

３．「感覚をつなぐ表現活動」の授業内容と様子

前章では全15回の授業内容を示したが，本章では「感覚をつなぐ表現活動」として試みた第11回の授業内容「匂い・手触りを形・色・音にする―触覚・嗅覚を視覚・聴覚につなげる表現活動」について詳細な検討を行う。

【授業の手順】

⑴　授業前の準備には，感触の異なる素材として，①サンドペーパー40番，②綿，③ビーズの３種を用いることにした。素材が見えないように黒のビニール袋に入れ，グループの人数分を用意した。

また，異なる匂いを感じる素材として，①ヒノキのチップ，②ケヤキのチップ，③オレンジを切ってつぶしたもの（１ｂクラスと２ｂクラス），④匂いが感じられる程度に湿らせた緑茶とほうじ茶のティーバックを合わせて１袋に８バック（１ａクラスと２ａクラス），の４種の素材を黒のビニールに入れ，人数分を用意した。

手触りや匂いを感じるための素材については矢野と岡林で何度も話し合った。オレンジを匂いの素材として用いたのは，レッジョ・エミリアを参考にしたことによる。2014年に矢野がレッジョ・エミリアの現地を視察したなかで，佐藤・秋田

表２　「保育内容演習（表現）」の授業内容

第１回	領域「表現」のねらい／五感を使った活動について（矢野・岡林）
第２回	色をみる―「実物投影機を使って生活の中の色と空間構成を考える（矢野）
第３回	声と体のつながりを感じる―オノマトペを用いて（岡林）
第４回	手で触れる―粘土による触覚を用いた造形遊び（矢野）
第５回	環境を聴く―キャンパスの音聴き歩きと音日記（岡林）
第６回	クレヨン・パスを使った表現方法・技術―混色・ぼかし・スクラッチ（矢野）
第７回	音環境を感じる教材と指導法―絵本を用いた保育実践（DVD）の視聴を通して―（岡林）
第８回	絵の具を使った表現方法・技術―デカルコマニー・ドリッピングなど（矢野）
第９回	音を描く―民族楽器の音色と形・色の関わり（岡林）
第10回	匂いを感じる―木の香りによる保育実践（DVD）鑑賞と嗅覚による教材と指導法（矢野）
第11回★	匂い・手触りを形・色・音にする―触覚・嗅覚を視覚・聴覚につなげる表現活動（岡林）
第12回	感性を育む表現活動⑴ 音楽・造形・身体表現を統合した教材研究（矢野・岡林）
第13回	感性を育む表現活動⑵ 音楽・造形・身体表現を統合した表現方法の研究（矢野・岡林）
第14回	感性を育む表現活動⑶ 音楽・造形・身体表現を統合した作品づくり（矢野・岡林）
第15回	感性を育む表現活動⑷ 音楽・造形・身体表現を統合した作品の発表（矢野・岡林）

（2001）のビデオ教材にも紹介されているディアーナ幼児学校における果物等の匂いを用いたアトリエに着目した。そこでは，匂いをテーマとしたプロジェクトが展開されており，こうした取り組みを今回の授業に取り入れることを岡林とともに検討した。

手触りや匂いを教材として導入することにより，それらに興味を持つことをねらいとしながら様々な情報を感じとることに発展させ，そこからさらなる新たな表現が生まれ，広がるように，触覚・嗅覚の利用と意識化を目指した。

また，お茶の匂いを素材としたのは，先行する２クラスの授業（2021年12/２に実施）にオレンジの匂いを提示したところ，素材の特定が容易に

できることから，柑橘系の果物のイメージが色や形となって描画表現へ強く影響していたので，12/ 9に実施する２クラスには，匂いの素材を変更した。

⑵　授業の初めに学生たちを４～５人の６つのグループに分け，１グループに１つの素材を配布し，素材を触ったり，匂いを嗅いだりした。

写真１　サンドペーパーの感触を探る

⑶　次に，グループでワークシートにメンバーが感じたオノマトペを書き出した。

オノマトペは感覚的な言葉であると言われ[5]，視覚や触覚，身体的イメージと関わることも多いとされており[6]，感覚をつなぐ表現活動においてオノマトペに置き換えることは，目に見えない感覚を描画という表現につなげるために有効であると考え，取り入れることにした[7]。

学生はオノマトペについて，第２回（第３回）の授業で，動きとの関わりや音象徴についての知識を得ている。また，第４回（第５回）の授業ではキャンパスの音聴き歩きや音日記を作成し，身の回りの音をオノマトペで表す体験をしている。

⑷　書き出したオノマトペなどを手掛かりに，感触や匂いから感じたイメージを，模造紙にクレヨン，コンテパステルなどを用いて描画した。

写真２　サンドペーパーの感触を描く

⑸　描画から感じられるイメージに相応しい音を用いて３分以内の音楽をつくり，発表した。音源として，レインスティックやチャフチャス，ティンシャなどの民族楽器や，拍子木や鉦などの和楽器，鈴やタンバリンなど幼児も使う打楽器などを多様に提示した。描画を図形楽譜のように用いて音楽をつくり，グループで発表した。

写真３　描画に相応しい音を考える

写真４　作った音楽を発表する

４．学生の表現について

⑴　サンドペーパーに触れたグループの表現

表３はサンドペーパーに触れた学生が挙げたオノマトペである。学生たちは模造紙に向かって図の配置や色使いを相談したり，オノマトペを声にしながら手を動かして描画を進めていた。

表３　サンドペーパーの感触を表したオノマトペ

触れた素材	表したオノマトペ
●サンドペーパー	ザラザラ・ザリザリ・ジョリジョリ・チクチク・トゲトゲ・ガサガサ・ギザギザ

図１，図２はサンドペーパーに触れた４グループの描画の一部である。短い直線や角が多い線が作品から窺われる。触覚から感じる痛さや鋭さから，具体的に砂や石などの粒子状の感じや，硬い草，ザラ

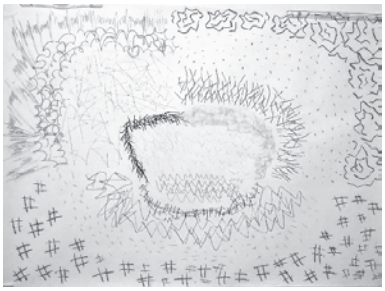

図１　サンドペーパーの感触の描画①

図２　サンドペーパーの感触の描画②

ザラした木材の表面などの荒々しく引っかかる様子をイメージし，色彩も茶色や赤色，黄色などを使って表現されている。

■サンドペーパーに触れたグループの音楽作品

図１を表したグループは，「トゲトゲ…」などと声を出しながら，真ん中から広がっていく感じを表そうと描画を進めていた。音楽作品では，タンバリンやマラカスを細かく揺らして，触覚から感じる鋭さやザラザラした感触，粒状の感じを表していた。

図２を表したグループの表現は，曲全体を通して刻まれる「シャッシャッ」というカバサの音色が心地よいリズムで響き，ザラザラしたような感触が表現されていた。また，３名それぞれがウッドブロックを鳴らし，パーランク（沖縄の片面太鼓）の枠をこする音を加えて効果的にサンドペーパーの感触を表現していた。全体的な傾向として，オノマトペと描画と音を巧みに統合した表現がなされていた。

写真５　カバサ

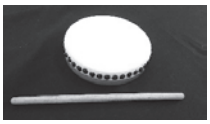

写真６　パーランク

⑵　綿に触れたグループの表現

表４は綿に触れた学生が表したオノマトペである。黒い袋に両手を入れた学生たちは，その感触に笑顔を見せながら，「フワフワ」「ホワホワ」などのオノマトペを口にしていた。

表４　綿の感触を表したオノマトペ

触れた素材	表したオノマトペ
●綿	フワフワ・フニフニ・ホワホワ・プワプワ・ポカポカ・モコモコ・モフモフ・モワーン

綿に触れた４つのグループの描画では雲状の曲線をもって表現されている作品が多く，パステルカラーのピンクや水色などの色を用いており，柔らかさや軽さ，おだやかさ，優しい感じをイメージしている作品が多くみられた。

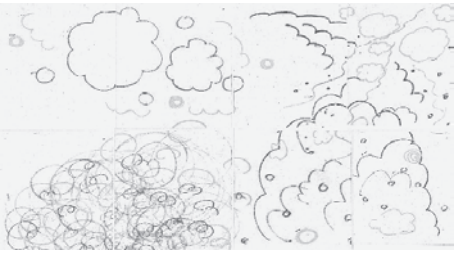

図３　綿の感触を表した描画

■綿に触れたグループの音楽作品

図３を描いたグループは，音楽づくりの過程とその表現について，「フワフワとしたものがホワホワと広がっていき，途中からプワプワの泡が湧いては消えていき，最後は優しい音の響きが残っていくように音楽の流れを考えた。やわらかいオノマトペが伝わるように表現した。」と工夫点を述べている。

音楽作品は澄んだやわらかい高音が特徴的なティンシャの響きから始まり，束ねた木の実を揺らして音を出すチャフチャスが沸き立つ泡を表現していた。また，爪を立ててパーランクの表面を擦る音で雲状の曲線を表していた。曲の終わりはティンシャのやわらかい響きが優しく余韻をもって消えていくように表現されていた。綿に触れたグループでは，全体的に穏やかなテンポで優しい音使いの作品が多くみられた。

写真７　ティンシャ

写真８　チャフチャス

⑶　ビーズに触れたグループの表現

表５はビーズを表したオノマトペである。粒状のものが擦れるようなオノマトペがみられる。

表５　ビーズの感触を表したオノマトペ

触れた素材	表したオノマトペ
●ビーズ	ツルツル・プツプツ・ブツブツ・パラパラ・ザクザク・シャラシャラ・ジャラジャラ・カシャカシャ

図４，図５はビーズに触れた４つのグループの描画の一部である。粒状のものを擦り合わせるような感じや，それらが転がる動きや音が感じられる表現が窺える。色彩についてはビーズを意識したためか，どのグループも様々な色が使われており，色鮮やかな作品が多い。

図４　ビーズの感触を表した描画①

図５　ビーズの感触を表した描画②

■ビーズに触れたグループの音楽作品

図４を描いたグループは，「感触が均一で同じ大きさだったので，一定のリズムで表現することを意識した。また，触った感じが堅かったので，響くような音ではなく乾いた短い音のする楽器を多く選んだ。ふんわりとした感触ではないため，曲の終わり方は余韻を残すのではなく，１音ではっきりと終わらせるようにした。」と，音楽作品を作る過程での工夫を述べている。

演奏では，「♩♩♩♩　♪♩♪♩♩」の一定のリズムがパーランクの枠打ちから始まり，次に鳴子，チャフチャス，エッグシェーカー，小マラカス，タンバリンなどの音色の変化や音の重なりを用いて続けられ，最後はパーランクの一打ちで終了した。

図５を描いたグループは，「初めは鉦と太鼓が一定のリズムを刻むことで小さい粒を表現し，徐々に粒が大きくなることをテンポを速めることと大きな音へ変化させることで表現した。」と，音楽づくりの工夫を述べている。

演奏は，「♩♩♩♩」の一定のリズムが，１拍目は鉦の音，２拍目以降はパーランクの音で刻まれ，その合間をレインスティックの音がつなぎ，さらに鈴，小マラカスの切れの良い軽い音がビーズの粒状の感触を表すように彩を添えた。

どのグループもビーズに触れた時に聞こえる小さな粒が当たる音を意識したのか，小マラカス，エッグシェーカー，レインスティックなどの楽器の使用が共通していた。

⑷　ヒノキの匂いを嗅いだグループの表現

表６はヒノキの匂いを表したオノマトペである。配布された袋の匂いを嗅ぎながら，学生たちは「いいにおい」という声を挙げていた。全体的にやわらかなイメージのオノマトペが多い中，木を意識したのか，木を切る音を表す「ギコギコ」というオノマトペもみられる。

表６　ヒノキの匂いを表したオノマトペ

匂いを嗅いだ素材	表したオノマトペ
●ヒノキ	フワフワ・ホカホカ・ホロホロ・ホワーン・モワーン・コフコフ・ギコギコ

ヒノキの香りは脳の活動と自立神経活動を鎮静化し，リラックスさせるといわれるように，ヒノキの匂いを嗅いだグループの描画は，香りからストレスを感じるような線はみられず，曲線を多用している。色彩も橙色や黄色などの暖色系を用いて表現する作品が多くみられ，匂いに好感をもっている様子が窺われる。

■ヒノキの匂いを嗅いだグループの音楽作品

図６を描いたグループは，「全員が感じたオノマトペがやわらかい感じであったので暖色を使用して描き，音もやわらかなイメージを表そうと，木の楽器を使用した。」と，感覚から色や音へ表現をつなげる過程を述べている。

演奏では「♩♩♩♫」のリズムがベースとなり，４拍のパーランクの音に続き，４拍めの裏拍にウッドブロックの音が打たれた。全体的には，温かみや優しさ，やわらかさなどを感じているグループが多く，ゆるやかなテンポ感や，ウッドブロックやチャフチャスなど，木の素材の音を活かしている点に共通性が認められた。匂いのイメージが共通していたことが要因であろう。

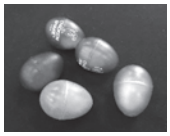

写真９　エッグシェーカー

写真10　レインスティック

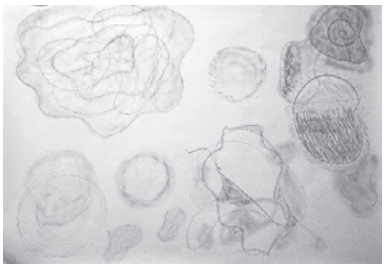

図６　ヒノキの匂いを表した描画

⑸　ケヤキの匂いを嗅いだグループの表現

表７はケヤキの匂いを表したオノマトペである。匂いを嗅いだ学生は，ヒノキとは対照的に「くさ～い」という声を挙げていた。ヒノキのやわらかなイメージのオノマトペと比べると，ドボッ，ブオッなど，匂いの強さ，きつさを感じさせるオノマトペが多くみられる。

表７　ケヤキの匂いを表したオノマトペ

匂いを嗅いだ素材	表したオノマトペ
●ケヤキ	ブオッ・ボワッ・ドボッ・ツンツン・カラカラ・サワサワ・スー・スゥーン

図７と図８はケヤキの匂いを嗅いだグループの描画の一部である。消臭効果や抗菌性を持つ点ではヒノキと同様であるが，授業直前にチップにしたので匂いがやや強く癖があった。そのため，多少の嫌悪感があるような黒色や茶色などを用いて強い線や色により表現している箇所が窺われる。次第に木の匂いにも慣れてきて，木の形をイメージしたためか，図８では黄色などを用いて立木のような形が表現されている。

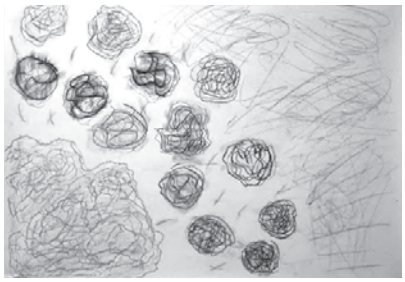

図７　ケヤキの匂いを表した描画①

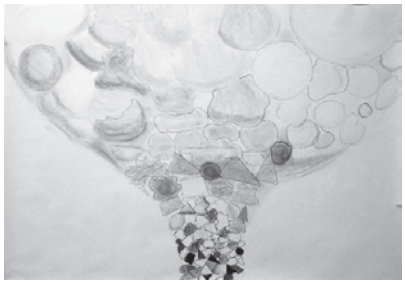

図８　ケヤキの匂いを表した描画②

■ケヤキの匂いを嗅いだグループの音楽作品

図８を描いたグループは，「生命や自然，木を感じられるような音色で，初めから終わりまで全員で音を鳴らすことを意識した。」と工夫点を述べている。

演奏はビブラスラップの音をアクセントにして，小マラカスやウッドブロックなど木の素材の楽器がリズムを細かく刻み，賑やかな音の響きが生命感を感じさせる仕上がりとなっていた。

写真11　ビブラスラップ

ところで，先にも述べたが，ケヤキの匂いはヒノキの優しい匂いとは異なり癖がある。筆者らはその違いを感じられるように，敢えて対照的な匂いの素材を選ぶことにした。

ケヤキを嗅いだグループでは，「ツンとした匂いが広がって遠のいていくようなイメージを表現した。まっすぐに伸びるような音やカラカラした音になるように楽器を選んだ。」などの工夫が述べられていた。全体的にみると，ヒノキと同様に木の素材の音を活かそうとしている点に共通性が認められるが，ヒノキよりもテンポは速めで，音量は大きめに表現がなされていた。

⑹　オレンジの匂いを嗅いだグループの表現

表８は，オレンジの匂いを表したオノマトペである。学生たちは匂いを嗅ぐとすぐに素材をオレンジと特定できたようで，にこやかな表情で次々にオノマトペを挙げていた。

表８　オレンジの匂いを表したオノマトペ

匂いを嗅いだ素材	表したオノマトペ
●オレンジ	シュワシュワ・ジュワー・シャッキーン・サンサン・シンシン・プチプチ・プルプル

日常生活で嗅いだことのあるオレンジのため，描画では橙色や黄色の色使いが多くみられた。形もオレンジの丸さや果汁のイメージが表現されており，丸などが軽やかに配置され，画面全体の動勢が感じられた。（紙幅により，描画の掲載は省略する。）

■オレンジの匂いを嗅いだグループの音楽作品

オレンジを嗅いだ２つのグループでは，「さわやかで弾けるような柑橘の香りを，音を徐々に重ね，温かく厚みの出るように表現した。」「さわやかで突き抜けるような香りをテンポを速めることで表現した。」「プルプルとしたみずみずしさをカスタネットを弾く音で表現した。」など，「さわやかさ」を表すための工夫が挙げられた。

一方，「楽器に木製のものが多かったので，みずみずしさを表す音に相応しいものがなかった」「匂いのイメージに合う楽器を探すのが難しかった」など，限られた楽器から音選びをすることの苦労が述べられた。演奏では，レインスティックや鈴などの軽やかな音色を用いて，さわやかさが表されていた。

⑺　お茶の匂いを嗅いだグループの表現

表９はお茶の匂いを表したオノマトペである。学生たちは匂いからすぐに素材を特定できたようで，スムーズにオノマトペを挙げていた。

描画における色使いは，グループによってそれぞれにみられたが，丸や円などをイメージして表現している作品が多い。どのグループも匂いのまろやかさ（丸く軽快な形状や緑色や黄色）と渋さ（ジグザグな形と紫色や茶色）といった両極端な形が同一画面に表現されている。オレンジ同様，日常で嗅いだことのある匂いのためか，視覚によるイメージ表現がみられる。（紙幅により，描画の掲載は省略。）

表９　お茶の匂いを表したオノマトペ

匂いを嗅いだ素材	表したオノマトペ
●お茶	フワーン・ホワホワ・ソロソロ・サラサラ・フワフワ・ムワァ・ボワーン・モワン

■お茶の匂いを嗅いだグループの音楽作品

お茶の匂いを嗅いだ２つのグループでは，「匂いの強さを色の濃淡や音の強弱で表現した。」「優しい匂いを表現するため，流れるような優しい音の出る楽器を選択した。」などの工夫が述べられた。オレンジのグループとは異なり，イメージを表す楽器が見当たらないということはなかったが，楽器選択におけるグループ間の共通性はみられず，鈴や小マラカス，レインスティックの細かい音や，鉦やティンシャの高い音，拍子木やウッドブロックの木の音など多様な音が混ざり合った音楽表現がみられた。

５．総合的考察

学生たちは今回の表現活動において，どのように感覚をつなぎ表現を試みていたのだろうか。また，活動からはどのような気づきが得られたのか，さらに学生はどのような感想をもったのだろうか。授業後の振り返りシートの内容をもとに，以下の点について考察を進める。

５．１　どのように感覚をつなぎ，表現したのか

学生たちの挙げたオノマトペを音象徴[8]の視点でみると，例えば表３のサンドペーパーの手触りからは，「ザラザラ・ザリザリ・ジョリジョリ」など，摩擦を表す「ｚ」や，硬い表面との接触を表す「ｇ」の音素が多く含まれていることがわかる。また，表６のヒノキの匂いでは，「フワフワ・ホカホカ・ホワーン」など，優しさや頼りなさを表す「ｈ」や，柔らかさを表す「ｗ」，はっきりしない様を表す「ｍ」などの音素が多く含まれている。他の素材でも同様に，感覚を通して的確なオノマトペが表されており，それらのオノマトペを手がかりに形や色，音へと表現がつなげられていた。表10に感覚をつないで表現する過程が読み取れる記述をまとめた。

表10　学生の記述にみられる表現の過程

①ヒノキの匂いから感じる優しさや温かみを「ホカホカ」などのオノマトペと暖色で表現し，突き抜けるような匂いの感じは「スー」というオノマトペと寒色で表した。

②ツンとした匂い（ケヤキ）が広がって遠のいていくイメージで描いた絵を，真っすぐに伸びるような音やカラカラした音の楽器で，徐々に音を強くして広がりを表したり，次第に弱くして遠のいていく香りを表現した。

③ビーズに触れると，「ジャラジャラ」など音のオノマトペが浮かんでしまい，感触をオノマトペで表すのが難しく感じた。少しずつ手先の感覚に集中していき，硬い感じや均一な形のイメージからオノマトペを見つけることができた。

表10の①からはオノマトペを媒介にして匂いを色で表す過程が読み取れる。また②では，匂いの強さや広がりを色の濃淡や音の強弱へとつなげる様子が見て取れる。③には，触ると音の出るビーズの感触をオノマトペで表現することの難しさと，表現を変化させた過程が窺える。

このように，学生たちは目に見えない感触や匂いのイメージを捉えたオノマトペを手がかりに工夫をこらして形や色に表し，それを音楽的表現につなごうと試みていたことが理解できる。

５．２　活動からどのような気づきが得られたか

⑴　音・形・色の表現方法への気づき

表11に，学生の記述にみられた音・形・色の表現方法についての気づきをまとめた。①には形と色彩の関連が意識化されていることが見て取れる。②と③には音の質感や強弱，ニュアンスに対する意識の深まりが読み取れる。また，音を自分たちで作り出すことへの意欲も感じ取れる。このように，学生た

表11　多様な表現についての気づき

①触ったもの（ビーズ）が堅く，明確な形をしていたので，やわらかい色ではなくはっきりとした色とメリハリのある線でくっきりとした形を表現した。

②絵の楽譜を描いてみると，さまざまな表現方法があることに気づいた。例えば，色ならば，色自体の違い，濃さや薄さ，描き方など，音ならば，楽器の違い，鳴らす場所や音の強弱などで違った表現になるということだ。

③触っても音の出ないフワフワとやわらかいイメージを音にするのに，木の音では硬いので，余韻のあるやわらかい音を楽器で表すのに工夫が必要だった。自分たちで用意するなら，ビニール袋を丸める音，ビニール紐を割く音など，もっと綿のイメージに合った音を作れると気づいた。

ちは活動を通して多様な表現方法に気づくことができたといえる。

⑵　他のグループの表現から得られた気づき

振り返りシートには「ヒノキの良い香りを表現していた班は心地よい木の音を中心に音楽を作っていたのに対して，ケヤキの香りを表現した班は音やリズムできつい匂いを表しているのが対照的で面白かった」「フワッとした物の表現には音の余韻が感じられ，カチッとした物には一定のリズムがしっかりと表現されていた。素材の違いによってオノマトペや音に違いが生まれることに気づいた」などの記述がみられた。他のグループの発表を客観的に捉えることにより，匂いや手触りが音楽表現の要素となり得ることへの気づきが得られたことが読み取れる。

⑶　保育活動へつながる気づき

学生の記述には，「保育者になったら，感触や匂いから絵や音を表現するだけでなく，絵や音から感触や匂いを当てる遊びも考えてみたい。」「五感を使って楽しむ活動は子どももできるし，優劣がつかないし，それぞれの意見を尊重できるので，面白いと感じた。」などがみられ，学生が自身の表現体験を基にして保育活動につながる遊びの着想を得ていることが明らかになった。

５．３　学生は活動を通して何を感じていたか

「オノマトペを媒介することで表現がしやすくなった。五感が刺激されているように感じた。ぜひ味覚でも挑戦してみたい。」「活動を進めていくうちに触感をどのようにして色・形や音で表現するのかがだんだんとわかってきて表現活動の楽しさを感じた。」「１つ１つの楽器の特徴を捉え，イメージに合ったものを選ぶことに対して楽しさを感じた。」「表現をすることの楽しさを改めて実感し，子どもにとって表現が大切であると気づいた。」「試行錯誤しながら，その匂いにぴったりの音や色，形をみんなで探し，見つけた時には共感する喜びが生まれた。」など，学生の感想からは，表現の楽しさや喜びを感じ取っていることが確認できた。

６．まとめと今後の課題

この度の活動は，学生が表現の幅を広げることに意識を向ける一助となったことに意義を見いだすことができたといえよう。

オレンジやお茶など，“○○の匂い”と特定できる匂いについては，視覚からイメージした色や形が優先的に表現されてしまうことが，学生の描いた作品から確認できた。素材が何であるかが分かることは，匂いを確かめる過程での学生の不安やストレスを軽減し，安心して活動ができることの一要因ではある。しかし，匂いを優先してイメージするためには，具体的な色や形がイメージしにくい匂いの提示が必要であり，匂いの素材選択が検討課題である。また，“ほのかな匂い”“強烈な匂い”など，匂いの強弱を工夫して提示することにより，オノマトペや音楽作品に変化が生じることが予想される。こうした点についても続けて検討の必要がある。

さらに今回は音楽づくりのために多様な楽器を提示したが，学生のイメージする音を表すには限界があった。今後は学生自身で必要な音具を作成するなどの授業内容を考えていきたい。

注

１）無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編（2017）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』萌文書林

２）岡林典子，山野てるひ（2020）「教員養成課程における音・形・色を関連付ける表現プログラムの研究―日本語と和楽器を用いて―」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第２号，pp. １－14

３）岡林典子，山野てるひ（2021）「教員養成課程における音・形・色を関連付ける表現プログラムの研究Ⅱ―音（音環境）とオノマトペに関する授業内容から―」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第３号，pp. １－15

４）初田隆，井上朋子（2017），古市久子，矢内淑子ら（2015・2017），小島千か（2011），智原江美，下口美帆（2013），麓洋介，水谷誠孝（2015）などを前掲２），３）で挙げているので，紙幅の都合により本稿では詳細を省略する。

５）田守育啓・ローレンス・スコウラップ著（1999）『オノマトペ―形態と意味―』くろしお出版

６）苧阪直行編著（1999）『感性の言葉を研究する』新曜社，pp. ２－３

７）初田らは音をオノマトペに置き換えることが音をかく上で有効な方略であることを明らかにしている。（初田隆，井上朋子（2013「音をかく活動の研究」『美術教育学』第34号，pp. 407－418）

８）浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』くろしお出版

参考資料

レッジョ・チルドレン／佐藤学，秋田喜代美：監修（2001）『レッジョ・エミリア市の挑戦―子どもの輝く創造力を育てる―』小学館教育ビデオ

謝辞／付記

本研究は，JSPS（課題番号17K04889 代表者：岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発」／課題番号19K02821代表者：矢野真「幼小連携のための保育・教育実践における木育教材開発」）の助成を受けている。